
俺とその周りの人たちのありふれた今日。

瑠架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とその周りの人たちのありふれた今日。

【Nコード】

N9378L

【作者名】

瑠架

【あらすじ】

主人公の赤井健翔は、平和主義者の中学生。

なのに、少し変わった不良(?) 野田、山崎に出会って、もう平和どころなんかじゃないっ！

主人公とそれを取り巻く人々が、全力で青春を走り抜ける、ちょっとバカで、恋愛も入っちゃう？ 盛りだくさんなお話(だと思う)

……用は、学園系小説です。文体が軽い(下手?) なので、ある意

味すんなり読めるかもです！

4000アクセス突破！

みなさんに最大の感謝をこめて――・・

キャラ紹介P(、▽、●)／(前書き)

キャラ紹介ですW

キャラ紹介P(∧、∨、●)／

・あかいけんと赤井健翔・・・主人公。男。俺です。中学2年生。ラブアンドピース万歳な主人公さま。

体格・・・普通。何から何まで普通。

顔・・・設定ではカワイイ系？

性格・・・気が強くはない。でも弱くもない。そして、たまーに優しくかったり。小学生と間違えられてショックだったらしい。

・野田くん・・・なんか知らないけど俺にいろいろ教えてくれる。便利っちゃ便利。

体格・・・普通。背が高い。

性格・・・よく分かんないけどいい人そう。てかい人だと信じる。ちよっと不良っぽい外見だが中身はただのバカ。

・山崎くん・・・名前はこれから出てくるはず。きっと優しい人。
違う中学で、謎多き人(?)

体格・・・空手やってきましたみたいな感じのいい体格。

性格・・・よく分からない。

・龍野くん・・・大きな野望をお持ちの、主人公がなぜか殺気を感じてしまう人。野望にはいろいろ訳がありそう。

・性格・・・これから明らかになるはず。

・体格・・・かなりスマート。さらさらヘア。

・安城 佳世・・・通称『カヨ』。くりくりした目でめっちゃ可愛

い。野田くんの幼なじみ。

・性格・・・結構はつきりしている。物事をはつきり言わないと気が済まない。

・体格・・・綺麗なくせのない黒髪。たまに髪を結んでいる。身長はあまり高くないが、足が長い。

・2年C組の愉快な(?)仲間たち・・・これはその都度紹介を。

ぷろろーぐ（前書き）

この小説は、某小説サイトに投稿したものを、若干改変して載せています。

途中、喧嘩の描写があるかもしれませんが、

では、ごゆるりとお楽しみください。

ぷろろーぐ

プロローグ

俺の願いはたった一つ。それは、平和で穏便な人生を送ること。

俺のたった一つの願いを、神様は受け入れてくれるとずっと思っていた。なのに、神様は、俺の人生

にちょっとスパイスを利かせてしまった――。

そして、俺の人生がこんなに楽しくなることも、危険になることもなかったのに――。

何で、何で神様は俺に味方してくれなかったのだろうか……。

何で、俺は危険な道を歩んでしまったのだろうか――――。

<<now rodin

g. . .

ぷろろーぐ（後書き）

→プロローグです。

200文字に満たない満たないWW
WW

1話：新しい学校：

「はあ…。ここが今日から通う学校かあ…」

俺、あかい けん赤井健翔はぼつり、とつぶやいた。

校舎を見上げる。校舎は、俺を嘲笑っているようだった。

「…健翔、ちゃんとするのよ」

母さんにこう言われる。

「うん」

俺は小さくうなずいた。

「お母さん、健翔君。…最後に言っておきますが、ここの学校は、そのう…：教室がかなり荒れていたりします」

メガネをかけた先生が、こう言った。

「何ですか？」

俺は、興味本位でこう聞いてみた。

「若干問題のある生徒がいるもんでして…」

メガネをかけた先生が苦笑いした。

……なんか怖いところに来た気がする。

「では、教室まで案内しますよ、赤井君」

メガネをかけた先生の横顔が、老けて見えた。

2話：うおっ！何なんだここは！？

「今日は、転校生が来ています」

教室の前で、俺は待っていた。

そう、俺は転校生なのだ。

「転校生の、赤井君です」

どうやら担任だったらしいメガネをかけた先生が、ドアを開け、俺を教室の中へ迎え入れてくれた。

少し足がすくんだが、ひきつった顔をして教室の中に入る。

「転校生とか珍しいなあ」

「てかよりによってこことかね」

「ちょっと可哀想だわー」

「あいつの髪茶色いぜ」

などの言葉が飛び交っていた。

可哀想、の意味は分からなかったが、髪が茶色いのは生まれつきだ。

教室がざわつく。

：でも、思ったより教室は荒れていなかった。それにクラスの人
もいい人そうだし。

ただ、一つ気になることがあった。

あの、後ろの方でトランプしてる奴らは気になった。やっぱあ
いうのって、不良：の部類に入るのだろうか。

「赤井君、自己紹介を」

先生が、小さな声でささやいてきた。

「えーっと、今日からここの学校に転校してくることになった、赤
井健翔です。よろしくお願いします」

俺はぺこっとお辞儀をした。

「はい。みんな仲良くするように！」

先生が、満面の笑顔でこう言う。

「じゃ、赤井君の席はあそこだから、頑張ってね！」

先生は後ろの方の、一つ空いた席を指さすと、逃げるように去っ
て行ってしまった。

先生が、逃げた？

なんだか嫌な予感がしたけど、俺は黙って席に着いた。

「赤井君、よろしくー」

前の席の男子が、笑顔でこう言った。

「……よろしく」

俺も何とか笑顔で返す。

「……赤井って呼んでいい？」

前の席の男子は、ニヤッと笑いながらこう言った。

「ああ。お前の名前は？」

「俺？ ……野田って言うんだ。よろしく」

「あ……よろしく」

俺は、こいつの笑顔に若干不吉なものを感じた。なんだかやばい人のような気がする。

「へえ……野田くん、か。よろしく」

「別に野田でいいよ」

うう、やっぱりなんか怖い。この人は問題を起こしていそうだな……。

「えーっと……じゃあ野田」

「ん？」

「この学校って、荒れてんのか？」

……言ったあ。俺こんなこと聞いてよかったのだろうか。

そんなことを思っていると、

「最近荒れてきたなあ」

なぜかのんきな野田の声が返ってきた。

……いやいやそんなのんびりした口調で「荒れてきた」とか言われても信用できねえから。まあ俺が聞いたことだけどさ。

「へえ。最近ってことは、少し前までは普通だったのか？」

俺は、野田にこう聞いた。

「んあ？…ああ。普通だったな」

野田はあくびをしていた。

つかめない奴だな……。

「……ふーん」

そこで、会話は途切れた。

聞き慣れないチャイムの音が聞こえる。

その直後。

「久々のヒット来たね!!」

などと言いながら女子が俺の席に迫ってきていた。

「女子のお気に入りみたいだな」

野田が、プツ、と笑う。

「……はあ？」

意味がわからなさ……

「赤井君ってどこから来たのー？」

「えー？ 髪の毛茶色いんだー」

「何でこんな所に来たの？」

質問の嵐嵐。……ちょっと怖かった。

「えーっと、田舎の方から来ました。あと、髪が茶色いのは生まれつき」

できるだけ、平静を保つようにする。……だってさ、今までこん

な風に女子から声かけられることなかったんだもん。

「へえ。田舎、かー。いいなあ！　よろしくねー、赤井君」

「あは。よろしく」

その時、笑顔が引きつっていたのは誰にも分からなかっただろう。

2話：うおっ！何なんだここは！？（後書き）

えーっと、ここまで読んだあなたは神ですw はいw

全ての人に感謝の気持ちを。

まだ話は続く予定なので、コメント下記してください。

よろしく願いますw

では。

3話：普通の人の、はず……

「赤井―、今日暇か？」

昼休み。野田に声をかけられた。

「ん…暇だけど」

俺は少し身構えた。

「…そっか。じゃあさ―、俺のダチさん紹介するわ―。つつーことで、一緒に帰ろうな」

「…うん」

やっぱこの人怖い。「ダチさん」って変な人じゃないだろうな…。

「おい、そんなに固くなるなよ赤井―。別に変な人ではないから！」

野田が、からかうように笑った。…ってかこいつ、今俺の心読んだよな！？

「…分かってるよ」

俺は野田から目をそむけた。

思えば俺はこの時から、もう普通ではなくなっていたのかもしれない。

4話：帰りの会★

帰りの会。先生が、みんなに説教していた。

「いいか、中2にもなってそんなだらしくしてたら将来困るのは自分たちなんだぞ。ほらそこ！ 分かってんのか！！」

早く終わらないかなー、帰りの会。そうだ、忘れてたけど、俺は今中2だ。ちなみに季節は3月。もうすぐ春。

「早く終われし。まだですか芝田せんせー。俺急いでるんですけどー」

後ろの方に座っていたチャラめの男子が、かったるような口調で言った。

「あのなあ、お前のそういう態度がいけないんだって言ってるんだよ！」

芝田先生―メガネの先生のことだが、ぶちぎれそうな勢いでこう言った。：あんなこと言わなきゃいいのになあ。

「はあ？ 意味わかんねえし」

芝田先生をにらみつけるチャラめの男子。

「…ちょっと」

俺は、気づかないうちに立ちあがってしまった。

「何だ？ 赤井」

芝田先生が、不思議そうに俺のを見てきた。：うう、どうしたらいいだろう。

「えーっと、あのう：個人的な説教は、後でお願いします」

：俺の、精いっぱいのごまかし。何でこんなことしてるんだろう。

「は？ 転校生がしゃしゃり出ることじゃねえだろ」

この言葉に、いらっと来てしまった。が、ここは何とか抑えつけ、黙って席に着く。

「まあいい。お前は後で来いよ。じゃあ終わりっ！」

芝田先生は、チャラめの男子にこう言うと、帰りの会を切り上げた。

「さよーならー」

4話：帰りの会★（後書き）

→イマイチな仕上がりです（――；）

でわでわ
W

5話：新しい街はどんなところ？

「…赤井、悲しい知らせがある」

放課後、野田は悲しそうな顔をしてこう切り出した。

「…はあ？」

…悲しい知らせってなんだろう。

「今日は、ちょっとしかダチさん紹介できない。すまん！」

えっと…これが、悲しい知らせ？

……………。

「あ、野田くん…」

「何だ？」

俺は小さく息を吸った。

「あ、あのさ、そんなに気い使わなくても俺は大丈夫だから。転校してきたばかりとはいえ、君にこ

れ以上迷惑かけたくないんだ」

…少し声が裏返ってしまった。

「んあ？ …ああ、俺は全然迷惑じゃねえよ。むしろ楽しいから！
まあ、つつーことでまずはこの町の紹介からしようか」

野田はそういうと俺に小さくウィンクをし、学校の外に向かって歩き始めた。

「は？ 別にいいって！！」

俺は、歩き出した野田の前に立ちはだかった。

「何だ？ 赤井、用事でもあんのか？」

「っ！」

…こういう時に嘘をつけないのが俺の欠点。なぜか正直になってしまう悲しい性格の持ち主、俺。

そんな俺を見て、野田は、

「何にも用事ないって言ってたもんなー。昼間に。ってか、早くこの街のこといろいろ覚えておいた方がいいと思うぜ？ …これから暮らす街なんだし」

…まあ、それもそうかな。

野田の言うことに納得してしまった俺は、街を案内してもらうこ

とになりました。

5話：新しい街はどんなところ？（後書き）

やっとう話です。

もうちょい大きく区切った方がいいんでしょーかね・・・

6話：わくわくとドキドキ（前書き）

期末テストも無事終わり、久しぶりの投稿となります。

6話：わくわくとドキドキ

「えーっとなー、ここはゲーセンと映画館だろ…それで、あっちにあんのがショッピングモールの小っちゃい版。CDショップとか本屋とかいろいろあるから便利。…あっちは大きい電気屋さん。そこは市民会館。いろんな事やるころ。あとは…」

俺たちは、学校から少し離れた駅の近くに来ていた。意外というんなものがある街だ。

「結構いろいろあるんだな」

俺はぽつりとつぶやいた。

「もっちゃん！ この街なめちゃいけないぜ？」

「……はあ」

「でもな、自然もいっぱいあるんだぜ。ここらは結構都会だけど、ちよっと歩けば川もあるし」

野田が、楽しそうにこう言った。…川、ねえ。

「へえ」

とりあえず受け流しておく。…俺が前住んでいた所は、ここ以上に田舎だった。だから、映画館なんかがあるとわくわくする。

でも、わくわくするのと同時に、ちょっと不安だった。

それは、俺がこの街で平凡にやっていけるかということ。そんなに心配することはないだろうけど…。

「ま、こんな所だな。あとはちょっと遠くに行けばかなり都会に出る」

野田が、ちょっと眉をひそめながらこう言った。

「…あ、そういえば赤井」

「ん？」

俺は顔を上げた。

「赤井って、どこから来たんだ？」

…なんと答えればいいのか。悩む。すごく悩むところだ。

「えーっとな…結構この街の近く」

うん、本当のことだ。

「へえ。何市？」

…野田の奴、変な所に興味持つんじゃないよ。

「……………」

沈黙。そして。

「…××町から来た」

…思いっきり赤面。田舎者だと思われてないだろうか。

「は、まじ！？あそこ俺のじいちゃん住んでる！！」

お願いだから食いつかないでくれえ。

「そ、そうなんだ」

「××町ってことはちょっと方言使う？…ま、ここも方言使うけど」

「…使うよ」

俺は基本標準語だが、たまにぼろっと方言が出ることがある。んで、友達にからかわれるのだ。…ぜってー方言カッコいいのに。何でバカにされなきゃなんないんだろう。

「そっかあ。赤井も方言使うのか？」

「…うん、まあ」

「そっかそっか。なんか親近感わいてきた」

野田がニヤリ、と笑う。

「…へ？ 親近感？」

俺は顔を上げて、野田のことを見つめた。……こいつも方言使うのかなあ。

「うん。…あ、じゃあ今からダチさん紹介するわ」

「…ああ」

やっぱり変な奴…。

つかめない。つかむことができない。

7話：お友達？

俺と野田は、河原に来ていた。

「えーっと、ここは：河原。多分この辺にみんないるはずなんだけど…あ、いたいた。：おーい、山崎たちーっ！！」

野田が、向こうの方にいる人影たちに向かって叫ぶ。

「転校生君連れてきたぞ！！」

「：お、分かった。野田ナイス！」

なんか髪色の明るい男の子が、野田に向かってニヤリ、と笑いかけていた。

「えーっと、今は山崎。違う中学の奴なんだけど、いい奴だぜ」

野田が俺にボソツ、っと説明してくれる。

「：へえ」

俺は間抜けに口をあけた。

「名前なんて言うんだ？」

山崎、がこう聞いてくる。：多分同学年なのだろうが、何とも言えない威圧感がある。きっと別次元の人だろう。

「えっと…赤井って言います」

…なぜか丁寧語で返してしまった。

「そうか。俺は山崎。よろしく」

山崎が手を差し出してくる。

「あ…よろしく」

俺と山崎は握手を交わした。

「うーん青春だねえ！」

野田がよく分からないことを口走っていたが、それはまあ無視するでしょう。

「そっかあ。君が転校生、ね…」

山崎がふっ、と笑う。

「歓迎してあげたいのはやまやまだけど…その前に、君に一つ聞こう」

「…はあ」

俺は小さくうなずいた。

「君は、俺たちと仲良くやっていく自信があるか？」

…うーむ、難しい質問だ。

えーつと…。

「あの、俺人見知りだけど、それでもいいなら仲良くなれるよ？」

そんなことを口走る俺を前に、山崎は、

「人見知り？　んなこと誰も気にしねえから安心しろ！」

こう笑い飛ばしてくれるのであった。

何か分からないけど、まあ仲良くなれるといいなあ、と思った。

そして。

野田のおかげで友だちも出来そうな予感がした。

8話：学校でずいぶん違う……

俺はそのあと少し山崎と話をした後、河原を立ち去った。

「赤井、さっきのが俺のダチさんの一人な。ガチでいい奴だから。
…まあ、ただ手に負えない部分もあるが」

野田がこう説明してくれる。

「…手に負えない、って？」

俺は野田にこう聞いた。…やっと野田にも慣れてきた。めでたしめでたし。

「ん？ それはな…もうちょっとしたら多分わかるさ」

む…余計にわかんねえ。

「んで、山崎は俺のダチさんの一人な。あとは、今日塾やらなんやらで忙しいらしい。…んー、一人暇そうなのがいるな」

「…はあ」

なんやかんやでもう暗くなり始めていた。…ん、忘れてた気もするけど、今は冬。そして俺は中2。

「赤井、行ってみるか？」

野田が俺の顔を覗き込んでくる。

「あー…もう今日は帰るわー。ありがとな、野田」

「そっか。じゃあな！」

野田は俺の肩をポン、と叩いてから、笑顔で帰って行った。

「ふう…俺も帰るかあ」

俺は大きく背伸びをしてから、ゆっくり帰ることにした。

次の日。

転校してから2日目。

俺は、この学校の真の姿を目の当たりにすることになった。

それは――、

授業が授業になってない、というね。なんかすげえ状況だった。

…俺は…なんかいろいろと大丈夫なのだろうか…。

9 話：特別な日って……？

「…は？」

朝8時。教室にて。俺は思わず野田を睨みつけてしまった。

「…おいそんな怖い目で見るな赤井」

野田が震えあがるまねをする。

俺が野田のことを睨みつけているのには、理由があった。

それは。

「怖い目で見てないから。…ってか、普通はありえないよな。全校生徒の半分が欠席って」

…嘘だあ。昨日はほとんどの奴が来てたぞ。

「いやいやそれがあり得るんだよ赤井君」

野田が首を横に振りながらこう言う。

「ふーん…でも、昨日は半分以上来てたじゃん」

俺は、一人で勝手にうなずきながらこう言った。だって、本当に昨日はいっぱい来てたもん。

「っあー、昨日は特別」

野田が頭をぽりぽり掻きながら額に指を当ててこう言う。

「特別？」

昨日は普通の日に見えたんだけどなあ。何が特別なんだろう。

「つまり、簡単に説明するとかこういうことになるな」

野田が何やら黒板に書き始める。

……？

俺はその様子をぼーっと眺めていた。

「図で説明するとかうなるな。うん」

野田が意味の分からない絵を書いて、自慢げにこう言った。

「…何、これ？」

野田に向かい、小さな声でこう聞く。

「…え、まさか赤井、分からないのか？この絵が何なのか」

「…あー、分からないから教えてくれ、頼む」

俺の言葉を聞き、野田が得意げににやりと笑った気がした。

「りよーかい。…えーつと、この絵はな、特別な日、の図」

.....。

「何だそれ？…その意味分かんないのが、特別な日、の図？？？」

なんか頭がこんがらがってきた。どーしよ。

「なっ！！俺の素晴らしい芸術的な作品をけなすなんてっ！！いい度胸してやがるな。赤井お前には芸術的な作品の素晴らしさが分からないのか！例えば某有名画家の描いた絵とか彫刻とかその他もろもろ！！君は、君はっ！それをいとも簡単にけなしてしまうんだね！もういいよ。勝手にするがいいさ。俺は何も止めない。くそおっ……青春のバカやろ————っ！！！！」

野田が校庭に向かい思いっきり叫んでいた。朝練をしていた連中が校舎を見上げている。

「ちよ、何やってんだよ野田！恥ずかしい……っ」

「は、お前が俺の作品をけなすからだろーが！」

「けなしてねーよ！お前が青春のバカヤローだとか叫ぶのが原因だ

ろ！」

俺はこう言い放った。

その途端、野田の動きがぴた、つと止まる。

「はっ、俺は今いったい何を……」

野田がうう、と頭を抱えた。

「まあ一人劇はいいから、とつとこの絵が何なのか教えてくれ。うんとっても素晴らしい絵だから。…だから著作者の言葉を聞きたいんだ」

「あーはいはい。えーつと…この絵は…この絵はなあ…」

野田が頭を掻きながら、うー、とうなった。そして、何を思いついたのか、満面の笑みで俺に、

「これは、特別な日の図だって言ったじゃん」

と言った。

野田はそのまま、こう続ける。

「そう。これは『絵』じゃなくて、『図』なんだ」

「あーはいはい。…んで、その『図』のどこが特別なんだ？」

「それはなあ…ここだ」

野田が、『図』の一点をびしっ、と指さしながら自慢げにこう言
った。

——そこに、黄色いチョークでこう書かれていた。

『昨日はなぜみんなが学校に来たのか？』

——と。

…なんかい加減イライラしてきた。

「あのなあ…今俺はそれについて聞いてるんだよっ！さっきから
何も話進んでねえじゃねえか！もう
っ！」

半ばヒステリックに叫ぶ俺。

「まあまあ落ちつけ赤井。昨日がなぜ特別な日だったか？…b
e c a u s e : a h : そう、君が転校してきたからです」

ふむ……って待てよ？

10話：謎の人。（前書き）

更新遅くてすみません＞＜

10話：謎の人。

「俺が転校してきたから、あんなに人が？…嘘だろ!？」

「うん。嘘に決まってるじゃん」

笑顔で即答された。

…だよな。そうだよな。…ちよつとビビったわあ。

「てか嘘はやめようよ。心臓に悪いから」

俺は再びため息をついた。

「はいはい。本当のことを言うと、昨日が特別だった理由は…」

野田の顔が、キリッ、と一気に真面目になる。

「理由は？」

「んー、実際のところ俺もよく分かんないんだけど、多分あいつが来てなかったのが関係あるだろうーな
ー。いじめられっ子には優しいらしいけど」

野田がちよつぱり顔をしかめる。

「あいつ…って？」

「えーっとな…知りたいか?？」

「…うん」

俺は大きくうなずいた。その時初めて俺と野田の身長差に気付いた。…いや、これはきつと野田がでかいだけだよな。うん。

「この学年には…なんつーか、ちょっとみんなから怖がられてる…
つーか遠ざけられてる奴がいるんだ」

「…へえ」

「んで、そいつはすごく凶暴で危ない奴で…」

野田がすごく嫌そうな表情をする。

「？」

どうかしたのだろうか。

「あ…そいつが来た」

野田は絞り出すように、一言つぶやいた。

少し眉をひそめて教室の入り口を見つめる。

…と、そこに現れたのは――、

俺より若干大きいくらいの体格の男子だった。

…まさか、こいつが学校で怖がられてる奴なのか？

ちょっと悪いけど信じることができねえや。

「おはよー…あれ？ 君、昨日の転校生？」

彼は俺の前で足をとめた。

「…ああ、そうだけど」

まじでこいつのどこに怖がられる要素があるのだろうか、などと思っていると、

「あーえーつと…君の名前は？」

そいつがにっこり笑ってこう聞いてきた。なんか殺気を感じる…。

「俺は赤井健翔。お前は？」

「ん？ 俺は龍野秀人…赤井君？ だっけ、よろしくね」
たつのひでと

龍野秀人…画数多い気がする。気のせいかな？

龍野は笑顔で俺に握手を求めてきた。

「どうも。こちらこそよろしく」

俺と龍野は笑顔(?)で握手を交わした。

その時、何か違和感を感じた。

さつきより強い殺気。：別にダジャレとかそういうのじゃなくて。彼の眼が、とっても怖かった。

うーん、何て例えればいいんだろう：そう。

龍野の目は、何かを見透かそうとしているようだった。

そして転校してから二日目にして、泣きたい気分になる出来事が起ころうとしていた――。

11話：暇人探検隊？（前書き）

えーっと……もしよろしければ、コメントをくださるとうれしいです。

※もちろん、批判的な意見も参考にさせていただきます！

11話：暇人探検隊？

「♪探険に♪行きましよう♪れつつごー！ ……ということで、暇人探検隊出動しようではないか。赤井」

今は昼休み。

俺と野田は、暇人探検隊を結成した。…だって、それくらいしかやることなかったんだもん。

「探険って、どこを探険するんだ？」

俺は不思議に思い、野田のこう聞いてみると、

「え？ 学校探険に決まってんじゃないか赤井」

当たり前だろ、とでも言いたげの野田の声が返ってきた。

「決まってねーよ！！ てか何だよその小学生の時にあった感じの懐かしい行事は！」

「うん…学校探険は遠足くらい楽しかった行事の一つだったな」

野田がなぜか遠くの方を見つめる。…面倒くさいのでスルー。

「……へえ」

「ちょ、スルーですか赤井君!？」

「…っあースルーだよ。…もー」

野田のことを睨みつける。

「だーかーらー。そんな顔しててもモテねえよ？ 普通にしていればモテるものを」

野田が呆れた顔をしながら肩をすくめた。

「…別にモテたくないからいいし」

プイ、っとそっぽを向く。

「あっそーですか。もう俺はしらねえよ？ あいつに目えつけられ
ても」

野田が、静かな口調で俺のことを睨んでいた。

「…あいつ?」

少し動揺しつつ聞き返す。

「うん。朝に君と握手した人」

「…あ、今思ったんだけどさ、」

「ん?」

野田は窓からぼーっと空を眺めていた。

「あのさあ……龍野ってそんなに悪い奴なのか？」

そう。これが一番疑問に思っていること。

「……え？」

野田が、外を眺めるのをやめ、俺のことを目を細くしながら見つめてきた。

そして、少し周りを気にしながら俺にこうささやいてくる。

「……しょうがねえ。暇人探検隊出動すつかあ……」

野田が深刻そうな表情でため息をついたのは、青い空に吸い込まれて消えた。

12話..マジかよ……

「えーと、とりあえず紹介しとくけど、ここは俺とダチさん方の隠れ家」

俺が野田につれてこられたのは、体育館の裏だった。意外と日当たりが良く、明るい場所だ。

「ふーん……何でこんなところに連れてきたんだ？」

「え？ 龍野のこと教えてやろーと思って……まあ暇つぶしっつーのは秘密なんだが」

「あ、なるほど。いい暇つぶしになるかもな」

……納得。

「でもわざわざこんなところまで来てあいつのこと話す必要……」

そう言いかけて、口を閉じる。

野田がなぜか、ふっ、とほほ笑んでいた。

「……何だよ気持ちわりいな」

「……失礼だな君は。えーっと、龍野のことだっけ？」

「ああ」

変な奴……。

まあいいや。俺はさっきの野田の微笑みを頭から振り払い、話を切り出すことにした。

「えと、その龍野って奴から、殺気を感じるのだが」

「え？ ああ、あいつはそういう奴だ」

……………どんな奴だよ。

非常に気になったが、俺はできるだけ平静を保ちつつまた話を切り出す。

「じゃあさ……何で龍野ってあんなに怖がられてるんだ？」

「……んー、昔いろいろあったからじゃねーの？」

野田の目が体育館の方を追っていた。体育館の中で、元気に遊んでいる人がいっぱいいた。……その中になぜか校長が混ざってバスケットボールをしていた。元気だなあ。

「……そっか。でもさ、あいつってそんな悪い奴じゃないよな？」

「……ホントにそう思うか？」

「ホントに、ってどういう意味だよ」

俺は首をかしげた。

「んー……昔、色々あったからなあ。ってか、あいつお前と初対面だったから優しそうに見えたかもしれないけど、実際のところマジで危ない奴だから！ それだけは保障するっ！！」

野田がなぜか必死な表情をしてこう言う。

「……へえ。それで、そいつは昔何があったん——」

キンコンカーンコン。

もう、何て悪いタイミングなんだよ。最悪。

「うげ。まあまたあとで話せばいいよな？ 赤井」

野田がちよつと顔をしかめてから、俺にこう聞いてくる。

「……ああ。あと、もう一つ聞きたいことがあるんだけど……」

「ん？ 何だ？ 俺でよければ何でも聞くぞ」

「あの……すごい聞きづらいことなんだけど……」

思わず口ごもってしまふ。……うう、野田が真剣そうな顔してるから余計に話しづらいじゃねーか……。

「龍野って……不良の部類に入りますか??」

うん、よく言ったぞ、俺。まあ質問の内容が低レベルかつ意味の分からない、って言うのは気にしないこととするか。

……それにしても俺、一体何を聞いてるんだ?

野田は、

「は? ……はいんねえよあんな奴。てか常識的に入るわけねーかな」

いつになく冷たい口調でこう言い放つのであった。

「……はあ」

てか何だよこの威圧感。ちょっと怖い。

「じゃ、俺は先に行ってるから!」

野田は少し急ぎ気味に教室の方へ帰って行ってしまった。

「……?」

俺もそろそろ帰るかなあ。

……と、
いう訳で俺はゆっくり教室に向かい歩き始めた。

13話：怒りと不安

放課後。俺は、龍野に声をかけてみることにした。

「あのッ、た、龍野くん……」

これはなかなか勇気がいる。だって……何か龍野って、殺気を身にまといてるんだもん。

「ん？ ……赤井くん、どうしたんだ？」

龍野がやけに優しく応対してくれた。朝に感じた殺気が嘘のようだ。

「えっと……ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

俺がそういうと龍野は持っていたカバンをぎゅ、っと強く握りしめ、

「うん。もちろんいいよ」

笑顔でこう言ってくれるのであった。

「……ありがと。あのさ……」

「ん？」

「君って、もしかして俺のこと嫌ってる？」

……聞いてから後悔した。何ちゅー意味わかんねーことを聞いているんだ俺は！！ てか面と向かって言うことじゃないだろ！

なんだか泣きそうだ。こんなこと聞いて龍野を怒らせたら――、

「うん。嫌いだね」

ん……？ 気のせいだろうか。今龍野の声が聞こえたような気がする。しかも、はっきり『嫌い』って言ってた。

「まあ、そうはいつでも俺はまだ赤井君のことあんまり知らないけど。でも、そんなこと自分で聞いてくる奴は……俺はそんなに好きじゃないな」

龍野が、苦笑いしていた。その笑みは、朝感じた殺気に似ているものがある。

「……はあ」

でも、そんなに悪い奴には見えないんだよな、なぜか。

「まあそんなに君のことは好きじゃないけど……とりあえず転校生クンには、俺の野望でも話しておくか――」

龍野が、空に浮かぶ雲を見つめる。

「あのな、俺には、野望があるんだ」

「……？」

「まあいきなりこんなこと言われても分かんねーよな。んまあ、その野望っていうのが、」

龍野の目は真剣で、やっぱりどこか殺気を感じる。なんかさー、目力？ってゆーのがすごいんだよなー。

「この学校を、すごくいい学校にしたい、って野望なんだ」

……いい学校、か。こいつ意外とよさそうな奴じゃん。

「へえ。それはそれは素晴らしい野望をお持ちで」

意外とよさそうな奴だけど……いい学校にしたいとかそういうことにはあんまり興味ないな。

「……からかってる？」

龍野が、俺のことを鋭い眼で睨みつけてくる。……うう、怖え。

「……いや」

俺はじつ、と龍野のことを見た。

「そっか。ならいい」

龍野は、すぐに俺から目をそらした。

ふう……。何か命拾いした。」

「まあ、俺の野望を達成するのを妨げてくるような奴は、容赦しないから。——特に、野田くんとか、赤井君とかそこら辺の連中にはね」

今、俺の名前が聞こえた気が……。って、

「はあ？　俺、別に龍野の野望なんか妨げてねーぞ！？」

うん、絶対おかしい。容赦しないから、ってかなり困るんだが。そして何で龍野は俺に敵意むき出しなんだあ——っ！！

「ん……。お前はいるだけで俺の野望妨げるからさ。こっちも容赦しない、ってことだ」

かなり傷つくんだが……。

そう思ったが、俺はあえて龍野にその事を言わなかった。

——なぜって？

答えは決まっているだろう。今龍野にそんなことを言ったら、何をされるか分からないからだ。

でも、俺の口は俺の考えに逆らうように動きだしてしまう。

「……は？　俺がいるだけでお前の野望妨げる、ってどういう意味

だ？」

俺は龍野のことを睨みつけた。

かすかに龍野を怖がる気持ちもあったが……今はなぜか、怒りの方が大きくなっていた。

なぜなのかは分からない。でも、龍野のよそそしい態度に、急にいらっと来てしまったのだ。

「まあそんなこと言ったってお前には分からないだろう？」

「……っ！ てめえっ！！」

気づいたら龍野につかみかかりそうになっている自分がいた。……やっべ。何してんだろ、俺。

やっとのことで手を止めた俺は、

「じゃ、帰るわ！！」

とつとと家に帰ることにした。

ひい、変なことやらかしそうになっちゃった……。。

14話：茜色の空

「っあーもー……」

帰り道。

俺の気持ちはまだ落ち着かず、何だかむしゃくしゃしていた。

「ッ……！ 一体何なんだあいつはっ……！！」

地面の石ころを思い切りけとばす。

石ころはふわ、っと草むらに落ちた。

……草むら？

顔を上げ、周りを見回してみる。

「あっ……」

そこは、昨日野田と来た河原だった。

なぜか体が強ばる。

「……んでさー、俺赤井にちょっと……なんだけど……気にしなくていいと思うか？」

「赤井なら……だろ。俺はあいつと……張ったらいい勝負

なんじゃないかと思ったからなー。あんなオーラのやつ初めて見た・
・・・」

声はぼそぼそと喋っているようで、よく聞こえない。ただ、声には聞きおぼえがあった。

「……？」

俺は、河原の中へ、ゆっくりと歩いて行った。声はどんどん近くなっていく。

「まあ、お前が気にしてるんなら、早くカタつけに行けばいいんじゃないの？ お前の問題なんだし」

「それもそうだな……」

河原には、予想通りというかなんつーか……野田と山崎がいた。川をバックに立って話している二人の姿は、迫力があった。何か上手く言い表せねえけど。

「おっし……じゃ、俺赤井んところ行ってくるわ！ あんがとな、山崎！」

野田が河原をかけ上ってくる……って、

ヤバいっ！！

これじゃあ俺が盗み聞きしてたことがバレ――

「おっ。ちょうどいいところにいた、赤井」

バレた……………。

俺は海よりも深く通り過ぎる風よりも長いため息をつき、その場に背中から倒れ込んだ。

…………なぜかって？

そりゃあ死んだふりをするのが一番だからだ。

「…………あ、赤井っ！？ 大丈夫かっ!？」

野田が俺のことを必死にゆすってくる。

…………騙されるな、俺。こういうときは死んだフリが一番なんだから…………。

「や、山崎!! 赤井がっ!」

野田が、そこに立っている山崎のことを呼んだ。

「何だようっせーな…………」

山崎がダルそうにしてこちらに歩いてくる音が聞こえた。俺は目を半開きにして、状況を確認する。

「うっせーなじゃねーよ！ 赤井がつ！」

「赤井がどーしたっつーん……うおっ！」

山崎が飛び退く……ような気がした。

「何でこんなところに倒れてんだよ？」

「し、知るわけねーだろ！ 何か突然倒れて……」

「……分かった」

山崎が、ぼそっとつぶやきながら何やら考えているような気がした。……とてもじゃないけど、この状況で目を開けることなんてできない。

どっつ。

俺はこの時、自分の身に何が起きているのか分からなかった。

……突然、腹のあたりに衝撃が来たのだ。

「ぐッ……！？」

最初、俺はそれが痛みだということに気づかなかった。

だって、尋常じゃないくらいの力だったんだ、マジで。

「……ん、起きねえな」

どがつ。

今度はさっきより強い衝撃が頬に来了。……てかこいつぜってー手加減してないよな!?

「もう……」

山崎が3発目の蹴りを繰り出そうとしてきたとき、俺は耐えられなくなり、のっそり起きあがった。

「いってえ……」

起きあがってみると、鈍い痛みが残っているのに気づいた。

『あ、起きた』

野田と山崎が声をそろえ、俺のことを見つめる。

「……………」

あまりにも二人が静かに俺のことを見つめてくるので、俺は睨みつけるようにして二人のことを見

た。

「……何だよ」

背中と尻を軽く払いながら、ゆっくりと立ち上がる。視線を二人から外すと、そこには綺麗な茜色の空があった。

「うわぁ……」

思わずため息がこぼれてしまう。俺が前住んでいた所でも見れなかった、息をのんでしまうほどの綺麗な茜色の空。

「ん？ どうしたんだ？」

野田の声が聞こえてきたような気がしたが、俺はそれを無視して、茜色の空に見入っていた。

「……？」

不思議そうな顔をしながら、野田と山崎が、俺のしている茜色の空に目をうつす。

……と。

「……夕やけ？」

野田の不思議そうな声が聞こえてきた。きつと、野田にとっては何てことのない光景なのだろう。それに、おそらく他のやつらにとっても。

でも、俺にとっては普通ではなかった。

少なくとも今の俺にとっては、この茜色の空は、特別に感じられた。

なぜかはわからないけど。

15話：事件勃発！？

そのあと結局、野田とちゃんとした仲直りはしてないけど、バカ話をしている。

そんな野田が――、突然真面目な話を俺にしてきたらどう思うだろうか。

1. まず信じられない。

2. とりあえず話を聞く。

3. 呆れた顔で無視。

俺の頭の中に、三つの選択肢が浮かんできた。どれが一番得策だろうか、と考えてみる。

うーむ……。

俺は一人、腕を組んだ。そしてちらり、と野田の顔を見してみる。

……野田は、とても真剣な顔をしていた。これは恐らく、彼の本気の表情だな。

と、いうことは……。

俺の頭の中で、『とりあえず話を聞く』の選択肢がピカピカと点滅している。……初めて野田がこんな真剣な表情してるの見た。

「え？ もっかい言って、野田」

俺は人差し指を一本立てた。

「おう。何回でも言ってやるよ。……俺たちは、いや、俺と山崎は、他校の奴に喧嘩を売られました！ ……分かったか？」

「……ああ」

俺は軽くうなずいてから、野田の言葉を頭の中でもう一回繰り返した。……って、

「た、他校の奴に！？ 何でだよ！？」

ホントありえないと思う。何てこったい。

「何でって……決まってるだろ。奴らといざこざ起こしたんだよ。あいつがな」

いやいや決まってねーし。

「あいつって、山崎が？」

「そうそう。まったく、山崎の奴無茶しやがって……とまあ、それはどーでもいいんだ。

それでな、今日、そいつらが仲間引き連れてここに来るんだってさ」

野田が、さらっと、本当に軽い調子でこう言う。

だから、最初俺は、そっかあ、くらいにしかとらえられなかったのだ。

でも、何秒かしてから、やっと気付いた。

「は!？」

仲間引き連れてくるって……かなりやばいんじゃないのか？

それを野田に聞くと、

「ああ、まあ何とかなるんじゃないかね？」

こう返された。

なんで野田とか山崎はこんな平気そうなんだろう……。

と、思っている

トゥルルル〜♪

野田の携帯がなった。

「ん？」

野田がさっ、と携帯を取り出し、画面を見つめる。

「ッ……！」

その野田の表情が、一瞬にして固まった。

「野田？　どうかしたか？」

若干心配になった俺は、野田にこう聞いた。

「……山崎が……奴らに絡まれたらしい……」

「なっ……！！！」

俺は、野田の顔をじっ、と見つめた。でも、その顔には答えは何も書いていなくて。

「じゃ、どーすんだ？　助けに行くのか？」

野田が、何かを迷っているような顔をする。

そして、

「行く」

彼は自分自身に言い聞かせるように、小さい声でこう言った。

「……OK。行こう」

俺はゴクリ、と息をのんだ。

……何だか大変そうなことが起こりそうな予感がした。

15話：事件勃発！？（後書き）

夏休みに入って、受験生なので、更新遅くなります＞＜

16話：心拍数と自分の足の矛盾

どくん、どくん……。

さっきから俺の心臓はうるさいくらいに音を立てていた。まあ怒鳴りつけてもしようがないので、必死に心を落ち着かせる。

——だってどうにもこうにも慣れないのだ、喧嘩っつーのは。喧嘩なんてしないし。それにそういうのって面倒臭そうだし。確かに、確かにさ、そういう状況にあこがれたこともあるさ。

……でも、今は、そんな憧れとは程遠かった。

「はあ……」

大きな大きなため息をつく。憂鬱だ……。

「赤井何ため息なんかついてるんだよ？」

隣から、野田ののんきそうな声。

「……いや、いいよなお前は単純そうで……」

ぼくは、なんてことない野田の顔を見て、ため息をついた。

「は？俺が、単純？」

野田が、俺のこを見つめる。というか、睨みつける。

「まあ俺は優しいからすぐには手出ししないけど」

彼はそう言いながらも、こぶしを思いっきり握りしめていた。

……怖え。

「まあそれに……山崎を助けなきゃだし」

野田がこぶしを引っ込める。

俺と野田は、奴らがいる場所へと急いだ。

17話：緊迫に包まれる闇

俺たちがそこに着いたときには、事態はあまりよろしくなかった。

——山崎は、見るからにヤンキーみたいな奴に、囲まれていたのだ。

「っあ……」

間抜け面で、その様子を見つめていると、

「何やってんだよ赤井！」

野田に頭を小突かれた。……頭がジンジンする。

「つてーな！ ……んなこと分かってるっつーの！！ ……あのさ、てめえら、そこどいてくんない？」

俺は夢中になって、見るからヤンキーな奴らにこう言い放った。
ちよつと怖かったが、不思議と言葉がすんなり出てきた。

「んあ？ なんだって？」

……まったく、これだから最近の若者は。

心の中でため息をつく。男もいろいろと面倒くさいもんなんだな。

「だーかーらー。……そこ、どけ」

喧嘩、と言っても半分くらいは勢いが大事だ、と俺は思っている
ので、思いつきり低い声で、奴らにそう言ってやった。そしてその
勢いに乗って、奴らのことを睨みつける。

「ん？ このクソ弱い山崎の仲間が来たか？」

クス、とバカにするような笑いが聞こえた。

「……うぜえ」

俺はこぶしを握りしめた。

「山崎を弱いつて言うなんて、てめえすげーなあ？」

横で野田が、ふふん、と笑う。なぜか勝ち誇ったような笑み。

……？

俺は、首をかしげた。

「あのさあてめーら……山崎のこと弱いつつーのは、十年早いんだ
よっ！！」

そしていきなり——本当にいきなりだ——野田は、奴らに殴りか
かったのだ。

「！？」

あまりに突然のことに顔をしかめる奴らを見て、俺は心の中でほ

くそえんだ。

……よっしゃ、チャンスじゃん。

「うおりゃ——っ！」

俺も勢いに任せ、奴らに飛びかかる。

18話……怖い

手近な奴から、無我夢中になって殴ってやる。

それはそれほどきれいなものではなくて。

かといって乱闘とかそういうんでもなくて。

なんつーか……敵討ちつーのもきれいすぎかもしれないけど……
……ああ、もう俺何言ってるのかわかんねえ。

「くそっ……！」

何言ってるのかわかんねえけど、最近出会った奴のために、今、俺は殴りかかって行っていた。

「おっと？ 赤井ってなかなか強い感じか？」

横で野田が、クス、っと笑っている。……喧嘩しているのに余裕の表情だ。

「……さあな」

自分が強いのかなんてわからない。今は知りたくもない。

——なぜって？

そりゃ、どこまでも行きたいからだ。行けるところまで行って、

限界を超えてやりたいんだ。

平和が好きな俺にしては珍しい発言かもしれない。

——自分で初めて、そう思った。

でも、やっぱり喧嘩は嫌だ。痛いのだし。

んでも、一方で、ちょっとそんな状況を楽しんでる自分もいた。

何だか、こっちに越してきてから、自分を、つかむことができない。

……そんな自分が、自分じゃないようで、ちょっぴり怖かった。

ほんのちょっぴりだ。

19話：一件落着。

「んー、山崎の無事を祈って、かんぱ——い！！！！」

夜9時を回った頃。

俺たちは、河原で、安酒をあおっていた。

「いえーい♪」

……俺のテンションもどこか変になっている。てか、これがテレビだったら【※未成年者の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。】とか言うテロップが出る場面だろう。

「乾杯！」

酒なんて初めて飲む。両親だってそんなに行ける口ではないし、飲めない家系らしいし。

ぐびー、っと一杯、ビールを飲む。足元がふわ、っと浮きあがった。……気がした。

「……あ、言い忘れてたけどお前のはノンアルコールだから。……飲めないって言ってたしな」

「ぶはっ！」

俺は、口に含んでいたビール……いや、ノンアルコール飲料を吹

きだす。

「ふざけんなよっ！ 何で俺だけ……」

「飲めないんだろ？ んじゃー無理に飲ませても危ねーじゃん」

……むう。確かに。

でも、ノンアルコール飲料で酔っ払ってた俺って……。なんだか、急に恥ずかしくなってきた。

「チッ」

本物の酒飲みたかったなー。

などと思っていると、

「おらよつと。そんなに飲みたいんなら、どーぞ？」

若干……いやかなり酒臭く、明らかに酔っている山崎が、俺に瓶を差し出してきた。

「それはなあ、ういすきーだ！」

山崎に渡された瓶をじ、っと見つめる。

……ウイスキー？ ああ、樽に入ってるあの高級な……って、

「ウイスキー！？」

俺は、目と耳を疑った。今、俺の目の前に、高級ウイスキーの瓶がある。

……当然だが、貧乏な中学生の俺は、そんなこと信じられない。というか、信じろ、という方が無茶だ。

だって、山崎はまだ中学生だぞ？

「ん、親父のぱくって来たんだよオ。×××××の、×××××つーウイスキーだ。××年ものだぜエ？……オラ、川の水で割ってこいよオ、赤井ィ」

×××××って……すげえ。酒に詳しくない俺でも知ってる名前だ。

「っ……」

しばし、立ち尽くす。俺は、目の前の瓶に圧倒されていた。

……そんな時。

バタッ

……山崎が、倒れてしまった。

20話：苦笑いするほかに何がある？

「っ！だ、大丈夫か！？山崎っ！」

あわてて山崎に駆け寄ろうとすると、野田が、

「んもー酒あんまのめねーくせに無理するから……。ったく……」

呆れた顔で倒れた山崎を白い目で見つめていた。

……。それでいいのか？それでいいのかよ、野田？

助けたりとかないのか？

すごく疑問に思ったけど、俺は黙っておくことにした。

「……赤井もあんまり無理はすんなよ？」

「……おう」

俺はウイスキーの瓶を地面に置いた。そして、

「あのさ、お前って、酔わない方なのか？」

と、野田に聞いた。

「……ああ」

野田が、どこか、どこか一点を見つめながらこう言う。

「……ふーん」

「んー、帰るか？」

野田が立ち上がったその時。

「待てよ野田。ちょっとくらいいいじゃねーかよオ、オイ？」

山崎が、野田の足首をつかんできたのだ。

ずる、つと転げ落ちていく二人。

……って。

「危ないっ!!」

俺が駆け出した時には、もう遅かった。

山崎と野田は――川の方へと転落していった。

山崎と野田の動きが、スローモーションで俺の目に映し出されていく。

「っ——」

声を出したかったけれど、声が出なかった。

そして。

ばしゃ——ん。

ド派手な音を立て、彼らは川へと転落。

「うッ……」

悲痛の叫びを上げる、二人。……うわ、ご愁傷様です。

「ってえなあ……調子乗ってあんま飲んでんじゃねーよ山崎っ！」

……ドガッ。

嫌な音がして、野田が山崎を川に沈めようとしているのが見えた。

……うわ。嘘だろ？

ちょっと怖いや。

強くそう思ったが、黙っていることにした。

……なぜって？

そこには川があって、野田がいるからさ。

20話：苦笑いするほかに何がある？（後書き）

改行多くてすみません＞＜

評価・感想などお待ちしておりますm（＿）m

21話..うう……

次の日。

野田は、舌打ちしながら教室に入ってきた。

「ッあーもう……」

かなりイラついているようだ。どうしたんだろうか。

「もう川なんて嫌いだ……」

野田がドカツ、と自分の席に腰を下ろすのをボーッと眺める。

「どうしたんだよ野田……?」

俺がそう聞こうとして野田に近付こうとした時、野田が不機嫌な理由がやっと分かった。

「うっ……」

野田は……野田は……

生臭かった。

本当にクソ生臭かった。思わず鼻つまんじやいそうなほど生臭か

った。

「最悪……昨日あいつに川に突き落とされたせいでさ、何か臭い抜けなくなった。」

……あそこ、遊泳禁止なんだよな」

「へえ……そりやお気の毒に」

うーん……でも、この臭いのきつさは、さすがに可哀想だ。

「ちゃんと洗ったか？」

とりあえず、こう聞くと、

「洗ってもこれだからあいつにムカついてんの」

ぶっきらぼうに答えが返ってきた。

「はあ……」

昨日の出来事を思い出し、苦笑いする。

今日、学校で山崎は大丈夫なのだろうか？ 酒臭くなってそうなか？
気もするが、川の臭いの方が強いのか？

うーん、でも、何にしろ二日酔いしてそうだな……。

とりあえず影ながら彼の無事を祈っておこう。

22話..オーラ輝く美少女さま

「ねえ、ヤス？」

それは放課後に起こった。

「ヤス？」

さっきから、野田の耳元で、女の子がこう言っているのだ。

そして野田は、それをずっと無視し続けている。

「……？」

何だろう、この女の子。

俺はちらり、と野田のことを呼んでいる女の子を見た。

「ッ！」

……見てからすぐ、目をそらすことに決めた。

野田を呼んでいる女の子は……すっごく、すごく、野田に不似合いなほどに、可愛かったのだ。

「ヤスったら！聞こえてるんなら返事くらいしなさいよっ！」

野田を呼んでいる女の子が、むっとした表情になる。

「んあ……何だようっせえな……」

野田がやっと、女の子に反応した。野田は、女の子に向かい、ひらりと手を振ると、

「あ……何だ、カヨか……」

女の子……カヨ、さんとかいう人の方を気まずそうに見た。

そして、

「……んで、どうしたんだ？カヨ」

女の子にこう聞いた。

女の子は野田を思いっきり睨みつけると、

「ヤスのバカっ!!」

——いきなりこう言い放ったのであった。

「……はあ？」

野田が、明らかに混乱している。俺もだけど。……いや、俺は、目の前にいる美少女の存在に混乱してるんだけどさ。

「何だよいきなり？」

「言葉のまんまよっ！他校の生徒に喧嘩売るなんて、マジありえない！ほんと、バツカじゃないの！？」

女の子——影ながら『カヨ』と呼ばせてもらうことにしよう——は、弾丸のごとく、こんな言葉を野田に浴びせた。……ホントにいきなり。

「……」

口が半開きになっていた。

カヨは、別に比喻とかじゃなくて……なんか、オーラが輝いていた。常にバツクには花があるような感じだ。

「何でお前がそんなこと知ってんだよ！？」

……お前、だって。野田とカヨは仲いいのかな。

「……よく聞いてくれたわね。それはね……」

カヨが、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「女子の間で、噂になってんのよ」

23話：女子って……怖い。

……数秒の沈黙。そして。

「女子って怖い……」

野田がぼつり、とつぶやいた。それに思わず、うんうん、とうなずいてしまう。

そして彼は、

「つか何で女子の間でそんなうわさが流れんだよ？女子って喧嘩系嫌いじゃねーのか？」

不思議そうにそんな言葉を口にした。自分の舌の上で、何度も言葉が転がしているように見えた。

「あー……」

カヨが少し気まずそうな顔をする。

「そーゆー女子には噂流れてないと思うよ。他の子が気を使ってくれて」

「ふーん。……でも噂が流れてるっつーことは、誰かに見られてたってことか。……やっべーな」

むう、と野田が唸る。俺は、野田とカヨのやり取りを黙って見て

いるしかなかった。

「何がやばいのよ？」

「いや……昨日喧嘩した奴に、もしその女子の顔が知られてたら……お前だってヤバいと思うだろ？」

「……そうね……」

カヨも、むむう、と唸る。

そして、

「あ、でも。その子遠くから見てたよ？」

「……何でお前が知ってるんだよ」

野田が、呆れたようにカヨのことを見た。カヨが、顔を伏せる。

「……見てたんだな？」

野田が、呆れた口調でカヨに向かいこう言った。

「……うん」

顔を伏せたままうなづく、カヨ。

「ほんっとに誰にも気づかれなかったか？」

「……うん」

カヨの顔が明らかに曇っていた。……初対面の俺でも、これくらいは分かる。

——カヨは、何かを隠している。

「……ふーん。ならいいけど」

野田は、カヨからプイ、っと目をそらした。何か、怒ってるような感じだ。

ちらり、とカヨの顔を見してみる。カヨの表情は、やっぱり曇っているように見えた。

「赤井、帰ろーぜ」

「え、野田……」

カヨと目が合う。

「っ……」

カヨは心底困ったような顔をして――、

「まあ、あたし帰る。じゃあね、ヤス――と、赤井君」

バイバイ、と手を振り帰って行った。

「何だよあいつ……」

野田が不満そうに、実に盛大にため息をつく。

そして、

「まーいっか。赤井、山崎んとこ行こうぜ。……あいつぶっ殺さなきゃなんねーしさ」

爽やかな笑顔でこう言い、俺の肩に手をまわしてくる。

「……おう」

首絞められそうな状況で、俺はうなずくほかなかった。

24話：過ち

「……あつれえ、まだあいつ来てねえや」

河原にて。

野田は人気ひとけのない河原を見回しながら、残念そうに小さくつぶやいた。

「……だな」

河原は静かだ。俺はわりと、こういう場所が好きだ。何っーか、落ち着くし。

「……」

川の水面を睨みつけるように見つめる。

ひよい。

静かすぎる川が何だか俺の心を無性に淋しくさせるので、水面に向かって石を投げてみる。

——ぽちゃん。

静かだった水面に、一つの音が生まれた。

そのあとも、結局山崎が来ることはなく、

「ん……俺、そろそろ帰るわ。……赤井は？」

野田は俺のことをちらっと見て、こう聞いてきた。

「あー……俺は、もうちょい居るけど」

少し考え、こう返す。

「ん……そっか。……じゃな、赤井」

野田が、俺の肩にポン、と手を置く。

「……おう。じゃーな」

今になって後悔する。

何で俺はカッコつけて河原に残ってしまったのだろうか？

——このことをまだよく知らなかったが故の過ちだったんだ。
きつと。

25話…ムカついたらダメだって分かってるけど…

「あれ。おつかしーな神元お。ここに奴らがいるんだろ？」

ぼけーっとしながら、河原の芝生の所に寝転がっていたら、人の声が聞こえてきた。

「“神元お”って何だよその小っちゃい『お』は。ただでさえいいラついてんだからやめてくれ」

二人の男が会話しているようだった。……いや、『神元お』って方は女の人の声に聞こえなくもない。

「はぁ〜？別によくねえ？『お』くらい」

「……よくねーよ。お前にそれ言われるとバカにされた感があつて嫌だ」

俺は目を閉じて二人の会話を聞いていた。

「何だよそれ。失礼だ。失礼極まりないっ！！」

「あー分かったって黒崎。んで、あいつ……山崎いないじゃん」

……山崎？

無意識に、俺の体がピク、と動く。

俺は息を殺し、二人の声に耳を澄ませた。

「だな。今日こそはあの、野田とかいう奴も一緒にやってやろうと思っただけだよ」

「面倒くさいなお前も。……とっととケリ付けたいのに何でこういう時に限ってこないんだよあいつら……」

一人が、困ったようにため息をついた。

「まあしょうがねーんじゃない？ あいつらもだいたい俺達の威力分かってきたみたいだし」

もう一人が、自慢げにこういうのが聞こえてくる。

「……おれは威力も何にも持っていないけどな」

「まあいつか、今度で。……また出直すのも面倒くさいけど」

二人の男が、帰ろうとしたところ。

「……!？」

一人が、俺につまづいた。

『いってえ……』

一人の男と、声が重なる。

「まったく、何やってんだよ神元……って、何そいつ？」

踏まれて起きあがった俺は、髪の毛が茶色っぽくて、耳に穴が空いている奴と目があった。

神元、と呼ばれた方の奴が、

「……知るかよ。……あいつらの仲間なんじゃねーの？」

と、興味のなさそうな調子で言った。

「……マジで？」

耳に穴の空いている奴が、俺の顔をじっと見つめる。

「……」

俺たちは、しばし睨みあった。でもやがて奴の方から目をそらし、

「あのさ、お前山崎とかどこにいるか知ってる？」

と、軽い調子でいきなりこんなことを尋ねてきた。

「……しらねーよ」

即答。

「ふーん。……お前の名前は？」

「……教えるかよ」

「あつそ。まあいつかキョーミないから」

何て嫌味な奴なんだ。……ああイライラする。

「ちえー。神元、こいつも分かんねーってよ」

「……当たり前だろ」

……見たところ、神元って奴は冷静そうだ。耳に穴が空いている奴は、軽そうで、短気そう。

「……山崎に用があんのか？」

俺は、耳に穴が空いている奴に、こう聞いてみる。

「ああ。俺は主に、もう一人の『野田くん』って奴に用があるんだけどな」

「……へえ」

一体何の用なんだろう。でも、山崎も野田も結構暴れていることは知っていたから、俺はそれ以上聞き出そうとはしなかった。

そう、その直後だった。

26話：喧嘩勃発??

「何？ お前ら、俺たちに何の用があるんだって？」

聞き覚えのある声が二つ、聞こえてきた。

「……おっ。やっと来たか」

耳に穴が空いている奴の顔が、嬉しそうにほころぶ。同時に、神元って奴もニヤリ、と笑った。

「待ってたんだぜ？ お前らのこと」

「俺達も一緒だよ」

山崎と野田も、怖い笑みを浮かべる。

何だか状況が分からなくなってきたから、俺は一步退いて四人の様子を黙って見ていることにした。

「……んで？ 今日はどうしたんだよ？」

こう、山崎が聞くと、

「お前らと……けりつけに来た」

と、神元が冷静な口調でこう言った。

「そうそう」

耳に穴が空いたやつが、その通り、とうなずく。

「あー……この前のか。……どうする？ 野田」

「……俺に聞くなって。ってかこの前つつたら俺はまたくろさきんちよとやんなきやなんねーのか」

野田が、少し不満そうな顔をしていた。

……一体、これから何が起こるんだろう？

「てんめえ、おれは『くろさきんちよ』じゃなくて『黒崎』って何回も言ってるだろ！？ いい加減にしないとガチでキレ……」

耳に穴の空いたやつ——くろさきんちよ……いや、黒崎が、野田につかみかかりそうになっていた。

「……まあ落ち着けて」

どうどう、と黒崎をなだめる野田。

「落ち着いてられっかよ。……こっちは早くてめーらとけり付けたいんだって」

こう言う黒崎の目をじっと見ながら、野田は、

「……んじゃ、移動しないとな」

山崎と神元の方をちらり、とみて、俺の方に目を向けた。そして、
「そうだなあ……どうせだし、赤井にもついて来てもらうか」

……え？何で俺？

野田の言葉に、思わず耳を疑う。

なので、

「え？俺カンケーなくね？」

野田に不服を申し立てた。……だって、『どうせだし』って酷いよな！？てかそもそもこいつら喧嘩するつもりだろ！？

まあ言いたい言葉はいっぱい出てきたが、俺は言葉を飲み込み、これだけ言った。

「まあカンケーないけど……ほら、俺達の勇士見てもらいたいし？」

野田が、ペロッと舌を出す。

……ナルシストめ。

俺は心の中で野田のことを呪った。

すかさず、黒崎が突っかかる。

「んあ？野田くん、今何て言った？」

「え？俺達の勇士見てもらいたいし？　って言ったが」

それを聞き、黒崎がこぶしを握り込む。……その様子から、かなりの殺気が感じられた。

……怖え。

「おれがてめーなんかに負ける訳ないだろ？……あのさあ、マジでふざけんのもいい加減にしてくんない？」

が、野田は物怖じする様子も見せず、

「ふざけてないっつーの。むしろふざけてんのは君の方だと思うけど？」

と、軽く黒崎を鼻で笑った。

「てんめえなあ……ッ！」

黒崎が、こぶしを握り込む。

そして、一転した冷たい表情で、

「……ちよっとお前こっち来いよ」

黒崎はこう言い放った。

……え？何か嫌な雰囲気……。

と、思っていると山崎が、

「ったく……」

あきれた様子でため息をついていた。

……何か反応薄くないか？今からこいつら喧嘩するんだよね！？

神元が黒崎に向かい、

「くろさきー、頑張れよ？」

こう言い、ニヤリ、と笑う。ちなみに、この神元って奴は、なかなかにかっこいい。……まあチビだけど。でも喧嘩慣れしてそうな涼しげな顔が少し……いや、かなり怖い。

……おそらく学校でモテるタイプの奴だな。

まあそんなこんなで、河原には緊迫した空気が漂っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9378/>

俺とその周りの人たちのありふれた今日。

2011年10月7日10時39分発行